

とろまい

根室市歴史と自然
の資料館たより

2023.8 No.38



歯舞湿原

2023年2月7日付で新たに根室市指定天然記念物として、263.1ha
が指定された。

北構保男氏インタビュー「先達に聞く」	猪熊 樹人 城田 貴子	(1)
根室市天然記念物「歯舞湿原」の紹介	外山 雅大	(41)
令和4年度の埋蔵文化財調査、受入資料、おもな普及事業		(45)

北構保男氏インタビュー「先達に聞く」

文字起こし、編集

猪熊 樹人、城田 貴子

(根室市歴史と自然の資料館)

はじめに

根室市内に本店を置く大地みらい信用金庫では、2016年5月10日に創立100周年を迎えるにあたり、記念事業を実施してきた。その一環で、根室、釧路地方の各界で功労のあった方々にインタビューを行い映像に残す「先達に聞く」という事業が実施された。

この事業の中で根室市内で長く考古学研究に携わられてきた北構保男氏(1918-2020)のインタビュー収録が2012年4月11日と8月20日に、大地みらい信用金庫本店で行われた。インタビューは北村信人氏(大地みらい信用金庫相談役)と猪熊樹人(根室市歴史と自然の資料館)が行い、8月20日の収録分にはオブザーバーとして川崎一平氏(東海大学海洋学部教授)が加わった。



インタビューの様子

左：北構保男氏、右：北村信人氏

北構氏は2017年に自身が収集してこられた考古資料を根室市に寄贈された。インタビューの中には根室市内の考古学研究のあゆみや根室の郷土史に関わる部分がみられ、重要であることから、文字起こしを行った。なお、記録に際し若干の文言整理や注釈をつけている。

北村：どうも今日はありがとうございました。今年は雪がちょっと多くて寒い日が続いておりますけど、私どもの金庫がですね、大正5年5月に創立しております、ちょうど来月5月10日に満96年になります。

北構：ああ、そうでございますか。

北村：あと4年で百年を迎えますので、それに向けてですね、地域の大事なものをしっかり残して、長く伝えていきたいと、このように思って、まず最初に北構先生の考古学の世界のお話を頂きたいと思います。

北構：これまた恐縮でございまして、^{きび}驥尾にでも付して…。

北村：お願いを申し上げます。

北構：今日はまた、お招きいただいて、かえって恐縮いたします。

北村：学芸員のお話によりますと、わたくし素人でございますから、素人から聞いた方がいいんじゃないかというお話があったんでね。

北構：そうですね、その方がね。中途半端に知ってるんじゃ、知らない方に、ね。

北村：先生がいわゆる考古学の世界に興味を持たれたきっかけ、というところからお話をいただきたいと思います。

北構：はい、わかりました。根室というところは、今も北海道でも最も学力が低い、ということで…。今から30年ほど前に、われわれ議会で根室はどうしてこんなに学力が低いんだ、とって頑張ってやって、いくらかよくなったんですよ。でまた30年経ってひとたび上がり、ひとたびは下がってきた、というような環境のところですからね、文化と学問とは違うといいながら、根室というところの置かれている立場というのは、文化ということからすると、文化はわれわれの生活内容という風にとらえていますけども、高い生活様式ということからすれば、油断のできないところなんですね。

● 屯田兵2代目父親の話

北構：それは私の父なども本当の貧乏士族で、食うや食わずで、親に連れられて明治19年に入植するわけですけども、それからの状況なんてものは本当に惨めなもので、たまたま…

北村：あの、和田に入られたんですね？

北構：ええ、和田の屯田兵の…

北村：どこから入られたんですか？

薩摩の人だね。

北構：これは加賀です。

猪熊：薩摩ですね。

北村：加賀百万石、石川県の…

北構：そういう人で、和田の名前が今でもついてるわけですよ。入ったわけですけども、大体 10 年ぐらいでもって、屯田兵というものは瓦解してしまうわけですね。大隊本部が、ここに第二大隊ですか、というのが設置されるけれども、それは北見に移されるわけです。北見に移されたんだから、一同何百人か揃って北見に移ったかというそうでないんですね。事実上生活が困難になって、その頃、根室の漁業は悪くなかったですから、労働者として、農作をやめて、根室の町の労働者として入ってくるわけです。たまたま学のあるのは学校の先生だとか、巡査だとか、そういうものに入っていったんですね。そんなような中で、うちの父なども随分苦勞しているわけですけどもね。

北構：前田家の、下級武士ですね、そこから入ってきてますけども。あの頃の北海道の政策というのは大変だったし、ことに根室の場合は、「根室でイモだとかカボチャでできるのか」と言ったところが、「いや、できないことはありません」と言って、関係者が堀を作って、その堀の中で作物を作ったんだそうですよ。で、「できます」という話で。で、来たところが、風が強い、何もない、森林が鬱蒼としてる、それを切ってどうするか、っていうことですね、毎日切っては燃やし、切っては燃やして、根室から見ると和田の方は、夜になると、火がボォーボォー燃えて大変なことだったという中で、われわれの父は育ってくわけですね。

北村：相当な方々が入植されて…

北構：幸いにして、根室実業学校、今の（根室）高等学校の前身の（根室）商業学校の更に前、4 年制の（学校が）できましてね、そして待っていて、うちの父も、これに入るわけですよ。その頃でも今の高等学校ですから、それに入っているものは、また金持ちの子供達ばかりで、貧乏の子供というのは、うちの父ぐらいのもんだったそうです

北構：いやあ、北海道でも 30 何力所か、屯田兵、入ってますけどもね。最も地の利の悪いところであったということで、それから、あの頃のことですから、兵隊さんの組織というのは、大体官軍の流れである鹿児島が中心で、和田正苗というのが隊長で、これなども多分

よ。そんな話ですけど、余分なことですけどもね。

北構：そんなことがあって、そのうちに、うちの祖父と祖母とは離婚するね。それで澤崎というのが、市議員に澤崎くんというのがいますけど、親戚ではありませんけども同じ名前で、この名前で屯田兵で来たんですけども、離婚しますから、そして今の名前の北構に、祖母は再婚する。そして連れ子として、うちの父も北構姓を名乗るようになったわけです。ですから、その頃われわれの学校の在籍生徒の調べの中には、例えば、北構保男、肩書のところにですね、族籍って書いてあるんですよ。家族から下は、まあ僕も平民になっていますから、平民とどっちかで、われわれは士族だと思ってたんですけども、親父が威張ってますからね。

北村：北構そのものの姓は、お母さんは士族ですか？

北構：これは平民です。北構は平民です。それで親父はね「俺はこう見えても士族だ」今はそんな話は中では出ませんけどね。家族の中では、そういう話が出ないわけではなかった時代、「父さん、父さん、族籍って書いてあるから、これ士族って書くのかい？」って言ったら、「ん～、俺は士族の生まれなんだけど、北構姓を名乗ってるから

平民だ」ってということで、がっかりしながら、それを学校に提出した、というようなこともあってね。笑い話ですけどね。

北構：そんな時代の変わっていく状態の中でしたね。幸いにして父は4年間、新聞配達をして、教会の書生になって、そして卒業するわけです。真面目にやったっていうんで、その頃、実業学校出てる人は少なかったから、いっぺんに就職も決まって、第一銀行、今でいうと第一銀行って大したもんですけどね、その支店があったんですね。そこで採用されたんですね。後年引き上げていって、父は拓殖銀行に移るわけですよ。そんなことで、うちの父は屯田兵の子供ですけども、銀行マンになるんですよ。

● 銀行マンになった父親の話

北構：うちの親父は、貸付の方が為替かなんかなんですね。ところがですね、今でもわれわれの親戚の中にいますけども、三代前の有名なその頃の缶詰屋さんが、倒産するわけですよ。倒産の前後にですね、倉荷証券の虚偽があったわけですね。実際にモノが入ってないのに入ったと、いうようなことで、それで銀行の中では大騒ぎになって、責任者はもちろん解職、で、うちの親父は末端の方にいたんですね。だから、かわいそうだから室蘭に転勤しろ、と

いうことだったんですけれども、親父の話では、母がいるから私は転任しません、と言って、そこで辞めたんですよ。

北村：それがきっかけになって、根室の信用組合に入れた、と？

北構：ええ、町の有識者が、これは私も知ってるんですが、「今来た人どこの人だった」と、今の阿部薬局のところに、幸印西川さんという大きなお店があって「そこのご主人が来たんだ」と、「何で来たんだ」という話からいろいろして「家業は持ってるようだけれども、大した大きな商売でもないようだから、金融機関で、根室信用組合ですか、信用組合で人が欲しいということで頼まれてきたんだ」といって、大変偉い人に頼まれてね、間違いなく入ったんですね。

北構：私たちの子供の時には、信用金庫の建物というのは、大徳寺との下の角、にあったんでないかと思うんですけど、何かの写真で見たことがあるんですけどもね。そして親父の話では、須藤さん[※]という、あれは学校の先生あがりの方かな、何かが創始者であった…というんですね。

北村：最初ね。

[※]須藤公雄（1868-1923）

1886（明治19）年に鳥取県から和屯田兵村（根室市）に入植。根室監獄署や裁判所で書記を務め、1916年に根室町信用購買販売組合を創設。

● アイヌの宝物掘遺跡発掘の話

北構：アイヌの宝物掘り、というね、趣味があった。

北村：宝物掘り、趣味？

北構：はい、趣味。それはですね、畑を掘っていると、まあ、日本中どこでもそうですが、ことにこの辺は、いろいろな前に住んだ石器時代から、ずっと新しいものではアイヌ民族の生活の跡が出てくるわけですよ。そうすると、石器だとか土器だとか、そういうものですから、これ何だろう、ということになって、まあ、みんな持ち寄るわけですね。そのうちには、これアイヌの宝物っていう名前になってね。それを集めるというのが一つの趣味の形になるわけですよ。そういうのが何人もいるわけですね。

北村：えっ、遺跡を掘る？

北構：ええ、最初は掘るということとはなかなかあれですから、掘ってるうちに畑だとかなんかに、貝塚のようなものが出てくるわけよ。そうするとおかしいなといってるうちに石器が出る、

土器が出て、そしてみんなで持ち寄って、それを好きなやつは今度、貰ってきたりなんかして集める。そういう素朴なね、資料の集め方でもって始まるわけですよ。

北村：そんな出たんですね。

北構：出た、そうですね。ことに長尾(又六)さんあたりの千島と関係がある人で、千島は狭いところに、みんな家建ってますから、そうすると、家が建ったり、学校が建ったりすると、いろんなものが出てくるわけですよ。それを子供さんが送ってきたというかなんかして、箱いっぱいになってね。そういうのがあるわけですよ。それを、ふとしたことから興味を持つわけですね。

猪熊：先生と縁続きの方で谷内田さんという資料収集家がいましたが。

北構：あっ、そうそう谷内田さんってあの、最近まで靴屋さん、いらっしゃったでしょ。あの、亡くなられた二郎さん、ていうのがですね、この方また伊藤初太郎先生との関係で、このことに執念を燃やすわけよ。そしてこの方の発掘したものが、今でも北大の農学部の博物館、今、あの総合博物館ありますけども、あそこの中に入らないでね。

猪熊：はい、植物園の方ですね。

北構：農学部の博物館の中に今でもあります。その中に素晴らしいものがあるんですよ。谷内田コレクションは、もう他になくて結局農学部にあるものだけです。

猪熊：そうですね。私もこの前行って、見せてもらったけど、なかなか良い資料が多くあって。

北構：他には出ないぐらいのものがあります。ごく何点かは、私と親戚関係にあったんで、私のところにあるものがあります。ほんと2、3点ですけど、いいものありますよ。完全土器だとか、クジラの彫刻を薄くしたものなど、谷内田さんからもらったものがあります。

猪熊：そうですか、こういった先学がいらっしゃって。

北構：そうですね。こういう方々がいらっしゃって、町の、いわゆる市民生活をしている人達ですからね。その中で先生の、博物学、伊藤先生だとか、長尾先生だとか、そういう方がいらっしゃって。

● 弁天島の発掘調査

北構：だから弁天島、ここから見えてる弁天島、弁天島に、どうしてああいふ遺物が出るのがわかったかという

とね、人がいないところには発掘するわけないんだから、モノは出てこないわけ。弁天島は明治5年に灯台ができるわけですよ。で、灯台守というのは、ああいうところには一家中をもって必ず住んで、根室の場合は船を持っていた、根室との間に水だとかなんかも運んで、あそこで暮らしてた。で暮らしてきたから、青物を買おうとかなんかという時代じゃないから、小使いさんに畑をして、あそこで最初の農業をやるわけです。掘ると物凄いいね、一番最初にね、上の方から貝層が出てくるわけですよ。どうもおかしいものが出てくる、というのが、ここの始まりです。猪熊さんも、われわれと一緒に調査に参加していただいたりなんかしてますから…

猪熊：少し発掘にも混ぜていただいて、いろいろ勉強させていただきました。

北構：そんなのがまあ、あちこちにあって、そしてみなさん、それぞれ縄張りを決めたわけではないから、佐竹（渓谷）さんという人は子供さんが色丹にいたりね、色丹の資料を集めるとかね。それから、伊藤先生はご自身一人でしたけども、長尾先生の子供さんも、樺太にいた子供さんがあったりなんかして、樺太の資料だとかなんかも集めてらっしゃるんですよ。

● 北海道考古学の推移

北構：北海道ではね、一番盛んであったのは、やっぱり都市の大きさからしても函館ですよ。函館にはブラキストンっていう、有名な人がいて、彼も、ブラキストンはスチーマ、蒸気船を持っていた、そして北海道中を鮭だとか集めて、根室にも来るわけですよ。で、ブラキストンが一番最初に船で来て、そして浜中、今の霧多布です。霧多布へ上がって、そして今の国道をずっと根室まで来る途中でね、彼は竖穴を見つけた。そしてここに竖穴がある、ということのをね、彼の記録の中に出てます。

猪熊：ちょうど浜中から風蓮湖に抜けていく経路で。

北構：そうですね。それと弁天島にもね、船持ってますから行ったんですね。そして、何かが出るっていうことを聞いてたかどうかわからないけども、とにかく弁天島に行って、弁天島には石器時代の竖穴があるということを彼は記録してるんですよ。それを後から明治11年にジョン・ミルンが来た時に、彼は英国人ですから、根室に来る前にブラキストンの話を聞いていて、来るなり、弁天島を発掘したんですよ。そして出てくる、それが後年のオホーツク文化の遺物なんです。

北村：それは何年？

猪熊：それは明治 11 年でしたかね。

北構：明治 11 年ですね。（明治）10 年にはね、モースが来て大森貝塚を発掘してますからね。

猪熊：日本で 2 番目に古いお雇い外国人の発掘事例ということで。

北村：2 番目に古い。

北構：ええ、発掘の記録からすると 2 番目に古い、と。

猪熊：近代考古学といいますか、学問を目的とした発掘調査で、日本史の教科書に大森貝塚というのが出てきますけど、その次に古いのが弁天島遺跡だということです。

北構：そうですね。

● 考古学との出会い

北村：この「捕鯨彫刻図針入」（39 ページ写真参照）ですが、これ何度も写真が載ってますけど、これいつ発見したんですか？

北構：考古学を始めたのが小学校で。

北村：小学校？

北構：長尾先生あたりにくっついてですね、行くわけですよ。これを発見したのは、高等小学校、今でいう中学校 2 年生の時です。2 年生ですから 13 歳。

北村：はあ、それはどういう、掘ったんですか？

北構：ええ、その頃までにいろいろ興味をもって、将来は自然科学をやりたいと思ったりなんかして、そういう集まりが、「俺は天文だ」なんていうやつがあって天体望遠鏡とかね、まあ、比較的裕福な人で、僕んとも理解があったからね、僕んとは顕微鏡を買ってね。それで顕微鏡でもって、小さいものなんかを覗いてるわけよ。そのうちにだんだん、考古学に興味をもって。このあたりは商業学校でしたから、僕は商業嫌いだったから、本当は中学行きたかったんだけどもなかなか難しい時代でしたから、そのまま商業学校に入った。

北村：この針入はすごい貴重なものですね。

北構：ああ、そうですね。そして、その頃になってくると、根室という内部でもって、そういうお互いにアイヌの宝物を掘って、「俺、こういうものが出た」とかなんとか言っている。そこへですね、中央の人たちが入ってくる

わけです。というのは一つは、中学校2、3年頃にね、函館の馬場脩という、ドクター馬場ね、ドクター馬場がね、北千島の調査へ行ってくるわけですよ。それからもう一人はね、林欽吾というね、これも北千島の調査で、早稲田の政経出てましたけれども、妙なことに頭を突っ込んで、来るわけですね。それから学者でもいろんな人が来ますけれども、僕の関係のある人は、伊東、なんて言ったかな、東北大学の教授で…。

猪熊：伊東信雄先生ですね。

北構：ああ、信雄さん、伊東信雄先生がね、根室に来て、僕もお会いしたりなんかして、歩いたんです。

北構：で後年、そんなことをやっているうちに、網走に米村喜男衛さんというですね、床屋さんであって、そしてアイヌの宝物が好きで、そして青森から移住してきてですね、そして初めにモヨロ貝塚を発見した、という功績なんですがね。この人がたが道東の、庶民ですから大学の人ではないけども、たまたま私は網走に親戚がありましてね、そこへ行ったんですよ。そうしたところ、その親戚のおじさんがですね、今でもあそこに帽子岩という岩が



馬場 脩 (1892-1979)

北海道立北方民族博物館 蔵



林 欽吾 (1893-1965)



伊東 信雄 (1908-1987)

東北大学史料館 蔵

ずっと出てますけどね、そこまで案内してくれて、その途中にもヨロ貝塚という有名な貝塚が、遺跡があるわけです。で「保男君、保男君、ここにこれ貝出てるの、これ貝塚だぞ」って言ったら、その時もう僕はわかったわけ。「ああ、それ根室にもありますよ」って、弁天島で見えますからね。それからね、米村さんっていう人の名前を聞いて、米村さんに早速、駆け付けるわけ。そして「ああ、よく来た、よく来た」ってなもんでね。

北村：それはいくつ頃ですか？

北構：え〜と、中学校2年ぐらいですから、昭和7年頃ですからね。そしてその方が、そんなことやってんのは少ないから、「若いのによくやる」なんて、褒めてもらったりしてね。それから時々網走には、おじさんなもんですから行くと、高松っていう家なんだけど、その家に泊まらないでね、その床屋の2階へ泊めてもらって、そして、遺跡を案内してもらったりなんかして。それからずっと中学校の時も、その家に、休みがあると遊びに行ってたわけです。

で、え〜と昭和何年でしょうねえ、6年、10年、卒業が11年ですから、8年か9年ですね。米村さんとか行くわけですよ。それで米村さんところで見せてもらったり、楽しんだりして、夜

汽車に乗って根室へ帰ってくる。その時にあの頃の釧網線が、できて間もない頃ですから、東釧路で乗り換えするわけです、根室本線に。でその乗り換えする時にちょうど夕方薄暗くなってましたね。もちろん三等車ですから、薄暗いような電気がついてるね。ちょっと気をつけて見たところが、ちょっとこの横向いの方に一人の学生らしいのがいて、あごがガッチリした男でね。で、何かこうやって物書いているんですよ。どうも挙動がわれわれと挙動が似てるから、ピンと来たわけね。矯めつ^た眇めつ^{すが}して、知らない人ですからね。何回も行ったり来たりして、最後に決心してね、「大変失礼ですけども、これは考古学なんですか」って言ったら「そうだ」ってわけ、「俺は國學院の学生でね、稲生典太郎で、今は根室へ行くところだ」って言うんですよ。それに会ったのがそもそもね、深入りをする原因だったわけですよ。

北村：はあ、そうなんですねえ。

北構：で、次の日弁天島へ来て、一緒に発掘するわけですけど、その人が弁天島を知ってたというのは、この人も中央の東京にいて、オホーツク文化というものが、昭和5、6年の北海道の展覧会、学会からですね、大きくその輪ができて、で、やっぱりさすが東京

で、東京には親方級が何人もいますよ。その下に杉山寿栄男という、アイヌの土俗品の収集家です。今でも著書が残ってますけどもね。この方の家来で、そしてオホーツク文化っていうものをやってたわけ。ただし、その頃オホーツク文化っていうのはね、まず知らない人も多いわけです。日本の古代文化というのは縄文文化と、今いろんなことやってますけども、と弥生文化ですから、その間に入ってね、考古学の中に、まだオホーツク文化なんていうものは、そんなもんあったかなっていうような、知らない人の方が多かった。その頃に稲生典太郎さんは先生がそういう関係だったものですから、北海道に来てアイヌ民族のことも研究してたし、それからオホーツク文化のことも研究してた、と。で最後はね、「考古学やるなら國學院に來い、そして、今始まったオホーツク文化の研究をやろうじゃないか。」ということになったわけですよ。

北村：あ～、なるほどね。さすがですね。

猪熊：いや、ドラマチックな。

北構：國學院なんてのは、神主じゃなければ知らないでしょ。

猪熊：そうですね。神道の大学ですからね。



根室港に浮かぶ弁天島



國學院大學での一コマ



1939（昭和 14）年デパートの屋上で

北構：それがね、妙なことから、國學院に來い、と。あの頃、東大と京大の他に考古学の講座持ってるというのは、早稲田ぐらいのもんだっただんです。後から明治だとかなんかできますけどね。だから考古学やるっとなれば東大入るか、どこでも行ってできるわけではなかった。そんなこともあったんで、それなら、ってわけだね。それから本は送ってくれたり、いろいろ親切な人でね。この人後から中央大学の教授になって、死ぬんだけどね。優秀な人でね。根室にも何回も來たし。この人のおかげで僕は國學院に行ったんです。だから、稲生さんとよく飲む機会もあったし、「稲生先生、僕は稲生先生に会って幸福だったんでしょか、不幸だったんでしょか。」「君、考古学なんて不幸、俺に会ったから、不幸な目に合ってたんだ」って冗談を言ったもんですよ。それはいいんだけど、さあ、家の中が今度は大変なわけですよ。うちの親父は銀行マンですからね。商科大学か、あの頃地方にあった高等商業、そういうところに入れて、まあまあ銀行の支店長にでもなってくれば、天下取ったつもりでいたんでしょけど、それが國學院行くなんで、國學院なんて大学がそんなもんあるか、って話から、しかも文学部の中で、考古学なんてやったってですね、仕事のない時代ですから。だから僕ら最初に國學院に入った時もね、「ああ、

そうか、貧乏な学問やりに来たんだな。」って教授が言ったもんだ（笑）。

北構：そんなようなことでしてね。大反対だったわけですよ。さあさあ、困ってしまって、最後は一年だけ大阪商大だかの試験を京都で受けましたがね、落ちました。で帰って、来年今度に入らなきゃならないからっていうんで、秋になってからですね、予備校に行きました。神田の、ちょうどあの、今孫たちが勤めている傍なんだけど、ニコライ堂の、お茶の水の、傍の予備校に通っていたんですよ。ところが予備校はいいんだけど、來たところが、稲生典太郎先生から始まって、みんな考古学関係者ばかりなんですよ。そして、みんな大事にして泊めてくれたりね。いろんなことしてね。それで「今日はグループの集まりがあるから行かないか」っていうんで、考古学の会に出るようになったんですよ。で、その頃ね、あなた知ってるかどうか、まだ生きてるけどもね。江坂輝弥（2015年没）っていう慶応の教授。まだ死んだって聞かないから、生きてるね。

猪熊：ご健在だと思います。

北構：それから旧石器やってた仙台の芹沢長介さん。芹沢君だとか、そのほかね、ちょうどわれわれと同じぐらいの中学校出るか出ないかの奴が、青

年、でない少年考古学隊のようなことやってたわけさ。それをね、変わったことやってね、とんちんかんで、あちこち歩くもんだから、「考古ボーイ」って名前がついてたわけよ。「考古ボーイ」っていうのは、今でも古い人はね、もう忘れてるだろうけど、そういう名前だったわけですよ。一つ、面白いグループだったわけさ。あとからそれぞれ、慶応の先生になったり、明治の教授になったり、みんなそういう人ばかりですから。一角の人たちだったわけ。乙益重隆さんとかもそうだけでもね。そういうもんの中に入ったわけさ。僕は地方だからね、東京のボーイとは、中心人物になったわけでもなんでもないけども、そんなようなことで感化されて、もう一回考えるわけさ。親父に言われて、商科大学に行くことになってんだけど、人生ってのは、やっぱり自分で決めるもんだな、と。で、我が家に帰るわけさ。そして母親にね、「実はこうだけでも、あの～、父さんに頼んでくれ」って（笑）。

それがね親父はね、國學院なんていうんだら、旅費は送れない、ていう話で。いや、よくわかるよ。ね、親父の立場は、この頃わかってきたよ。しかしね、母親ってのはありがたいもんでね。人生真面目にやればいいじゃないか。じゃ好きな方に行きなさい、といって説得してくれたわけさ、親父を。

猪熊：お母さんの理解が。

北構：だからおかげさまで國學院行けたのさ（笑）。

● 大学卒業と戦争経験

北村：國學院を卒業されたのは何年ですか？

北構：そうですね。卒業したのは昭和11年の、あ、11年じゃない16年に卒業してるわけです。その15年の秋に繰り上げ卒業で、大学の繰り上げ卒業というのがあって、そして卒業と同時に兵隊検査。行くやつはもう行っちゃって、僕は瘦せてたんですよ、今でもそうだけでも。ですから徴兵官に「何だお前、電信柱みたいだ」って言われてね。丙種っていうのをやったわけさ、あ、丙種じゃない第3乙種というのがありましてね。その頃甲乙っていうのがあって、丙種になれば兵隊行かなくてもいいような体格の持ち主だったわけですね。それが丙種から繰り上げて、一番丙種のいいところ、第3乙種になったのね。で僕は第3乙種になったんだけど、幸か不幸か、そのまま兵隊に行かないで、85日間兵営には行きましたけど、応召して、そのままになるんだけど、そんなことで、卒業と同時に兵隊という戦争、昭和16年ですからね。なんで、もう、すぐ同級生では死ぬ奴が出てくるし

ね。戦争の真ただ中に入るわけです。それからすると僕なんかはずっと好きなことやっていたわけですからね、幸せだと思いますよ。

猪熊：戦争で学問も停滞しますし。

北構：そうですね。

猪熊：戦前にトーサムポロと一緒に掘られた須見洋さんも兵隊に取られて行ってという話を伺いました。

北構：そうね。須見君ね、あの人は神社の子供ですよ、厚岸のね。で神道部へ入ったんだけど、神道部って神主さんの。神道部に入るのやだからっていうんでね、考古学やって、國學院ですから神社以外の人は大体先生になるんだよね。だから中学校の先生なうってわけで、それで僕んところへ来て一緒に発掘した。(トーサムポロの遺跡は)彼の記念の出発の土地になるんだけどね。そんなことで戦争に入っていくわけです。

● 戦前の根室の様子は

北村：戦前の根室ってね、どういう感じでしたか？

北構：そうですね。

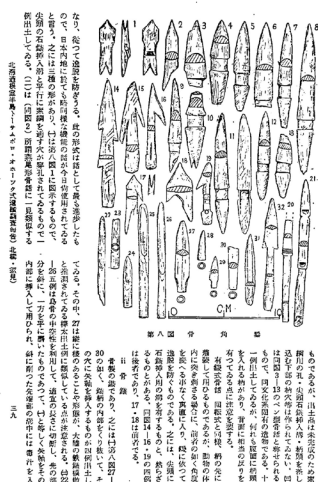
北村：ま、四島が当然ありましたしね。



1940（昭和15）年 国後島古釜布の発掘調査



1940（昭和15）年
樺太多来加湖畔の東京帝国大学演習林調査



北構保男、須見洋 1953「北海道根室半島トーサムポロ・オホーツク式遺跡調査報告」上代文化24 輯、31-48 頁

北構：そうですね。人口は2万、その年によって違おうだろうけど、2万5千あったかわかりませんがね。とにかく小さい町でも裕福だった、ということは間違いない。というのはそういう言い方するとあれだけど、経済史でいう、高利貸資本的な資本力の持ち主で、そして国後でも、択捉から向こうは函館の経済地域ですけども、色丹までの離島関係ですね、みんな親方が、子方を持っていて、そして前年に金を貸して、そして子方は、それでもって米を買ったりなんかして、船に積んで持っていると、それでもってって一冬食べて、次の春から一生懸命に働いて、で働いたものを金納でなくて大体はね、親方はね、金で貸すか、米だとかなんかで貸して、そして集めるものも、ちょうど封建時代の漁師みたいなものでね、モノでもって取ったわけですよ。昆布を取る、そして魚を取る。そしてその売買がですね、極端に言うと、高利貸資本的ですから、物凄く利幅の高いものを貸し付けるわけ。そして、上がってきたものについては、相場のこと知らないから島の人たちは、100円で売れたものでも60円と言ったりね。だからその点は物凄くね、生産者というのは、海だけじゃないですよ、山の方だって悲惨だったわけよ。それが後年の産業組合のね、農業協同組合と、海の方の水産の協同組合との組合運動になるわけですよ。

だから根室信用金庫も、うちの親父の時には、そういう組合運動の中にさらされていた時代があるんですね。ですから何ていうのかな、よくあの頃は産業組合の中に、信用金庫の何か「家の光」なんていう本がございます。あれなども一緒に組合員に配達したりなんかした時代がありますね。それから病院もやろう、ということで、根室、桜橋ですから今の弥生町のところにね、診療所を組合だけで作ったんでなくて、共同で作るという計画をして一時やったことあると思います。その時来た人の話だとかなんかを、もうその頃中学校の学生ですから、聞いてましたけどもね。医療も併せてやる、なんか産業組合と信用組合がどっかでもって一致して、両方とでやる、というような話だったですね。それ実現したかどうかわかりませんがね。

そんな裕福だったから、町の状況というのは、親方、小さい親方が踏ん張ってて、大きい親方は函館だったんですよ。だから地域からしても、大きな経済は択捉から向こう、ことに昭和12、3年にですね、サケマスの北洋での漁業が盛んになって、根室だけでもって100隻前後も出漁して、これは物凄い利権化してね、あとから問題になるんですけどもね。儲かるわけですよ。これなどは権利を獲得した人は、昨日までの長屋暮らしがね、いっぺんに住宅を建てて、そして奥さんたちにはいい

ものを着せて裕福ではあったわけ、偏ってはいたかもしれないけど。

● 釧路と根室の経済力の違い

北村：釧路はどうだったんですか？その時は釧路？

北構：釧路はですね。釧路のことは僕は、あまり詳しくありませんけども、釧路は明治 40 年ですか、あそこまで鉄道が来ますね。根室までは大正 10 年か。この 15 年間がね、釧路と根室の経済力の大きな差です。

北村：それと炭鉱とね。

北構：ええ。それと一つはね、今までは船が根室まで直接入ってた。それが鉄道によって、あそこで遮断されて、こちらの方が航路の主なところになった。まあ、いろんなことが重なってるようすけどね。そのへんで大きな差ができたわけですね。

北村：15 年間ですか？

北構：そう 15 年ぐらいですね。だから、明治 41 年に（石川）啄木が来た時は釧路で降りて、根室まで残念ながら来なかったわけ。汽車の線路があればね、啄木が来たんじゃないかって、よく冗談で言うこともあるんだけどね。

北村：やっぱり鉄道なんですね。自動車は、ほとんどまだね。

北構：そうですね。まだ自動車の時代じゃないですからね。

● 根室の商店の多さ

猪熊：戦前の根室市街地の地図なんか見ると、お店屋さんの数というのが、尋常じゃないですね、ほんと、びっちり、と。

北構：そうね、何て言うのかな、他の地方でも、小さい店があるっていうのがあれですけどもね。例えば、食品店の雑貨屋さん、それから魚屋の多いこと、根室になると魚屋がね、一つの町に何軒もあるわけよ。極端な場合は隣り同士で魚屋があったりね。

北村：魚屋さんが。



昭和初期の根室市街

北構：ええ、そういう魚屋の多いところ
です。ここは。というのは、小さい店
が多い。ちょうど井戸のあれでないの
かな、庶民生活と馴染む、九尺二間の
長屋に住んでさあ、そして棒手振りで
ないけども、魚担いでね、それで売っ
て歩く、と。というようなものが田舎の
暮らしじゃなかったのかな。だから金
かかんないわけですよ。そこ海まで行
くと、船から魚揚がるでしょ。そっか
ら買ってきて、すぐ担いでいって、こ
う売って歩く、と。それでもまあ、暮
らしができたということだね。だから
根室の物価は高いと、後から言われる
わけですよ。

北村：お菓子屋さんも多かったって。

北構：あ、お菓子屋も同じです。もの
すごく多かった。

北村：豊かだった。町中の経済が豊か
である、と。

北構：豊かですね。だから菓子屋なん
て、町の中に何軒も、それこそ魚屋と
同じように、隣り同士であったもんで
すよ。

● 造り酒屋も多かった

北村：で、その頃のお酒は「北の勝」
と「いろ媛」？

北構：その頃はそうですね。その頃、
明治の末期にはですね、6軒ぐらい造
り酒屋があった、って言うんですね。

北村：6軒ぐらいね。

北構：で、私がまだ子供の頃にはです
ね、カネカさんと、碓氷さんと、それ
からうちの家内の兼古とそれともう1
軒、花咲学校の下にですね、松岡とい
う酒屋さんがありました。それと今の
支庁（根室振興局）の下のところ、
大成酒造というところがあって、

北村：支庁のその下に。

北構：ええ、大成酒造といって、これ
が緑町でいえば、

北村：今のポスフル（イオン）の辺
りですね、ポスフル。

北構：そうです、あそこの上です。ええ、
高いところですけど。ちょうど今の旅
館、何て言ったかな、大野屋さんの後、
の向かいの駐車場のようになってま
す。

北村：海陽亭の向かいですね。

北構：ええ。あそこに大成酒造とい
うのがあったのね。これ町のお酒屋
さんたちが、出資してね、できたもの
で。

北村：それは飲んだことあるんですか？

北構：いや、ありませんね、残念ながら。

● 根室のお祭り

北村：お寺、神社、神社は金刀比羅さんね。お祭りは当時から、やっぱり賑やかで、大きかった？

北構：そうですね。あの頃の、やっぱりお祭りというのは、今と違って、一つは単に信仰心のことは別にして、楽しみがなかったですからね。集中してそういうものに、熱狂するわけですから、だからもうまったく、町を挙げてね。

北村：あー、その頃はね。

北構：何日間というのは、もう楽しみであり、要するに郡部からだって、わざわざ見に、千島から来るわけですから。僕もその船にね一回、国後から乗ってきたことあるけれども、お祭りだと言うんでね。機帆船を仕立ててね。わざわざ、お祭り見に行くために、乗って。その中に僕もたまたま行ってたから、それに乗って来る、と。もうお祭りってというのは、みんなの楽しみだったんじゃないでしょうかね。

● 根室の盆踊り

北村：お盆の、盆踊りはどうだった？
盆踊りは？

北構：盆踊りはまあ、われわれはあんまりあれですけれどもね。

北村：あの独特なもの。

北構：これも同じで、島の盆踊りってというのは、僕はよく知ってるんだけど、楽しみがないですからね。昆布取りは、ま、例えば、島では昆布取りがですね、朝3時ごろになると起きるわけですよ。そしてもう仕事するわけですね。そして朝天気いいと、あん時よくありますけどもね、天気の良い日だったら、暗くなるまで働いているわけですね。寝る暇ないんですよ。それでもね、お祭りになるとね、ずっと向こうの方から盆踊りの太鼓するでしょ。そうすると「おい、保男ちゃん、行こう」なんて、俺もそんなところで踊るわけじゃないからね。迷惑なんだけど、お客さんだから連れて行ってくれるわけさね。その楽しみ方がね、並大抵の楽しみではないわけですよ。ほんとに、待ち焦がれて、待ち焦がれて、そしてわっ、とね。

根室ってのは、やっぱりそういう傾向があって、終戦頃までわれわれ根室にいましたから、根室のことはわかりますけども。昔の盆踊りというのは、

一番最初は桜橋の近所に遊郭ありましたから、そしてあそこに警察もあったし、いろんな中心になる行事、官庁もありましたからね。ちょっと高いところには遊郭があるわけです。そうすると、そこへみんな集まって、遊女が踊る。遊女が踊ったのは、後からも山の上で見たことがありますけどもね。だから全然勢いが違うわけですよ。それを島から来る、郡部から来る、でね。もう一斉に来る。沸き立つ、とはあのことだね。ああいう熱気を一回見てるとね、この頃の盆踊りなんて、ほんとにね、こりゃ何だろう、と思うようなね。面白味が、熱がないのね。

● お祭りでの喧嘩騒ぎ

北村：そしてあの水産加工場がね、何ですか、缶詰中心に。相当ありましたんですね。

北構：そうですね。水産加工、海産屋さんていうのは、あれで、これはまあ時々話に出てくるんですけどもね。お祭りだとか、そういうふうになると、今、本町筋なんて昔の面影は、いくらかとどめているかどうか、わかんないけどもね。

お祭りになったら、まず本町筋は第1区で、芸者は全部総水揚げですからね、何日間か。それで山車に乗るのも芸者だし、それから金棒だって、みんな芸者ですからね。だからもう、全然

派手さが違うわけですよ。

猪熊：プロがやってるんですね。

北村：うん、プロがね。

北構：それに対してね、今度、日頃からね、本町筋にいじめられてね、安いものを一段と安く買ったたかれ、そしてね、高いものを買わされてるって、その、怨念があるわけさ。^{かたぎ}氣質が違いますから、それで時々喧嘩が起こるんですね。僕も一回喧嘩を見たことあるけどもね。金棒でたたき合うんですから。ケガして運ばれるとかね。そういうのがね、何て言うかな、町の中でも、そういうような経済を基盤にしたね、お互いの、山の上と下の人とそんなことではないけども、そういうような氣質の差があったようですね。

● オホーツク文化圏の範囲は

北村：縄文、オホーツク文化の話をお伺いします。オホーツク文化は北海道独特ですよ。本州にはないんですよ。そうするとオホーツクというと、稚内、それから下の方ですか、紋別あたりですか、その辺からも出てるわけですね。

北構：そうですね。

北村：ずっと南下して、で最後はこの

弁天島ということになるんですか？

北構：ええ。さっきお話ししたようにですね、根室というところは割合に裕福だ、ということもあって、裕福な人がやったってわけではないけども、そういう関心を持った、ほんとに、人たちが何人かいたんですね。で、この人たちがですね、さっきお話ししたように、全道的な、根室だけでなく、釧路は釧路、函館は函館、函館なんて古いですけども、小樽も古いし、そういうところの人たちが、経済力のあるところでは大きな組織になってくわけ。それが全道的になっていくわけですね。それから、その頃樺太も、日本になって、樺太でもですね、妙なものが出る、ってことになったわけよ。そのアイヌの宝物ではありませんけどもね、最初は縄文土器のようなもの、石器のようなのが出てた。日本の古い時代には、大体1万年からこちらですね、縄文という、2、3日前に大島直行君という人が、書いてたけども、あれはちょっと雑でないかな、と思ったけど、ま、一般的な話ではあれで、縄文というのは現代のアイヌ人の血につながると、ということが書いてある。あれはちょっと問題だと思うんだけども、ま、一般的にはいいでしょうけどね。で、そういうような縄文の文化と、それから二千年、ちょうど日本の国ができる前後に大陸から渡ってきた、縄文の人

たちとは違う人間で、違う生活様式を持ってた、二つの人たちの集まりだと。そして縄文は日本のほんとの根っこからいた古い人たちで、それがアイヌ人と関係がある。

それから二千五百年ぐらい前の、大和朝廷を作ったのは、朝鮮経由で日本に入ってきた弥生人は、縄文人と違う、これが本当の日本人の基本をなしてる大和民族の基ではないか。二つの文化があるということが言われてきたんです。今でも大体は、そういうようなことのようなですね。そういう二つの文化を構えて、一方は縄文土器の研究、山内清男さんなんてね、大先生がいてさ、僕らでも弟子ではないけどもね、よく知ってる人なんだよ。それから弥生は京都大学が主としてやって、國學院なんかもその系統なんだよね。本来はね。そういう日本の古い時代の文化ってのは、二つあった、と。一つはわれわれの祖先の弥生文化であり、その前にあった縄文の文化、これはどうもアイヌ人と関係のある文化らしい、と。この二つの文化が日本にあって、縄文の方が古い、と。で縄文のある時期に、その新しい弥生文化が来て、これが二つ混ざる、と。混ざったのが大和朝廷のようなですね、日本人の、現在われわれが日本人と称している人たちの基である、と。二つの文化がある、と言われている。二つの民族がね。

そこへ、昭和5、6年でしょうかねえ。

どうも弥生にも、それから縄文にも関係のない文化でないかな、というのが出てくるようになったんです。それは主として、明治11年のジョン・ミルンだとかなんかの、ことがあったり、網走の米村さんとか、大体道東、釧路からこちら、それから地図でいうと上の方の稚内、からですね、オホーツク海岸の方へ向かっての地域で、掘っていて出てくるものが今までのものと違う、と。例えば、石で作るものも、定型的とわれわれ言うんですが、非常にその、変化のない形の石の鍬だとか、石で作った斧だとか。その他にですね、骨で作ったものが出てくる、と。骨を加工して針のようなもの、こういう曲がった針だとか、スッとこう伸ばした槍のようなものだとか、そういうものが出てくる。これと一緒に出てくる土器、焼き物。焼き物も縄文土器と弥生式土器というようなものとは、一風変わった、細いソーメンのようなものを巻き付けたようなものだとか、それからポツポツと穴を開けたものだとか、そういうもので、どうもこれは相対的に違う文化ではないかな、ということが言われかけてきた頃に、さっきお話した昭和6年頃の札幌での大博覧会になって、そこへいろんなものが集まった中に、今までだったら2種類でしかないものが、3種類のオホーツク文化というのが、まとめて出てくるわけです。その頃は、まだオホーツク文化と

いう名前がないぐらいで。けども地域からすると、オホーツク海の周辺にしかないんで、そのほか樺太、それから千島、だということで自然に、オホーツク文化という名前になって、今、学術語として使われるようになったわけですね。それが、そもそものオホーツク文化の学会に知られるようになった元なんです。

北村：北方四島から出てないんですか？国後島とか。

北構：あつ、そう、それはですね。国後は出ます。私は北千島にも2回も行行って発掘してますから、端の端までオホーツク文化があります。根室にも縄文文化があります。北海道は弥生文化というものはないですから。弥生文化というのは、主として西日本から日本の中央部が多いですから。その他に縄文は全国的に。極端に言うと、沖縄まで縄文土器というのが出てくるわけです。

北村：擦文、てあるんですよ。

北構：いや、これは擦文というのは、土器の形式としては、模様のつけ方ですからね。北海道の土器の一番最後の時に、弥生の、中央のですね、弥生から大和朝廷のいわゆる日本文化になっていくわけですけども、そういうもの

の土器の作り方、擦文というのは、ハケでもって、擦って文様をつけたって意味ですから。そういうものが出てきて、それが日本文化の原始文化のうちの、最終に当たるとされているわけ。これは後からオホーツク文化とも関係があることがわかってきました。

● 北千島漁業

北構：北千島なんてのは、ほんとにね、明治26年に郡司大尉が開拓して、これがある意味で努力したけども、失敗するわけですけどもね。それっきりわずかに漁師が行って、それも小さい漁師でなくて、大きな漁師が行って、漁業の経営をしては損して、ずっと来るわけですよ。ところが太平洋の沖取り漁業の代わりに、その魚道を、北千島でもって遮断するってのが、北千島の流し網だから。遮断して、あそこです、北洋で取るものを、あそこで遮断して、日本でもって漁獲して、それを製品化する、というので北千島漁業っていうのは、初めて許可になるわけです。流し網の船が何百艘かな、さっきちょっとお話したけども、百艘ぐらいは根室から出て行ったんで。

北村：ちょっと、ごめんなさい。それは何年頃ですか？

北構：昭和10年前後でしょ。

北村：それは北洋漁業というわけですね？

北構：北洋漁業の日魯だとか何かはです、ね、本当の北洋でやってるわけですよ。その他にです、ね、ロシアとの関係の漁業問題が起こってくるわけですよ。大正7年の革命以後です、ね。勝手に日本人は、われわれをだまくらかしてる、という、ね。そういう批判が強くなって、両国の間に漁業協定を結ぶんだけど、どうもやっぱり日本の狡さにはかなわなかった、って、そう書いてありますから、ね。ロシアの関係者の



1938(昭和13)年 北千島占守島の調査
(北海道立北方民族博物館蔵)



1938(昭和13)年頃の占守島中川の漁場風景
(資料番号 1998-724)

話ではですね。それで今までの蟹工船だとか、それから漁業の大きな船で取るのを許可しなくなる。それに対応して、日本は北千島の流し網というものを陸で取るようにした。陸で取るといっても沖へちよっと出るんですが、その船の大半が函館の資本家で、根室から数百隻も行ってた、というわけですね。

北村：函館の資本。

北構：ええ、資本は大きな日魯、日水ですから。

北村：富山はどうなんですか？

北構：富山は、その中に入ってますね。漁業権を持ってる人の中に、根室に住んでるかもしれないけども、富山県人が多いですよ。リストありますけどもね。だから一斉に出るようになって、北千島行っても、泊まるところができたわけですよ。

● 北千島での発掘調査

北構：それで歯科医師でもあった馬場脩さんが、行くわけですよ。それで漁場に、顔役ですから函館のね、弁護士の子息ですから、それで妙なことをやる奴が来たと思われて、歯の痛い奴連れてったんで、歯見てもらいながらね。それで3回行くのかな、で4回と5回、

僕も行くわけです、助手になってね。その頃にね、北海道大学ではね、児玉作左衛門さんという面白い名前の人で、この人は馬場脩と同級生です。市図書館司書の浅野君。浅野君のお父さんってのはね、これ有名な人でね。学校の校長先生をやるかと思えばね、商工会議所の専務やったり、重ねて芸者屋の親方やったり、面白い人なんですよ。学校の校長先生だからね。僕らはその時代に生徒だったわけですけどもね。この人方も同級生で、この東京に考古学グループがあるように、函館にもそういうのを好きな人がいる、何人か子供にいたんだね。そして学校から帰るとね、みんなでもって、あの辺は小さい崖があったりなんかしてね、その、棒を持ってってね、下の方に「ああ、土器がある」って、こう突っついて、落ちたのを拾ってくるとかね、そういうその、アイヌの宝物の拾い方をしてたんですね。その中の一人の児玉作左衛門が、後から北大の医学部の教授になって、そして解剖学や人骨の頭、脳の研究を始めるわけです。そしてドイツに留学して帰ってきてね、馬場さんと同級生ですから、馬場さんが、ドクター馬場が、さっきお話しした米村さんが発掘している、網走のモヨロ貝塚から出た骨、それから馬場さんが北千島の及川というところの、占守の及川から出た骨、それから樺太のあっちこっちから出てる、主に鈴谷貝塚か

ら出た骨、これを見た時にね、ビックリしたって言うんだね。これは伝説的に伝わってるんですけどもね、その人間の骨をこう、これは大変だって思ったって言うんですよ。というのは日本にいない人の骨を始めて見たっていう。アイヌの骨は見てるわけです。ですけどもそれがね、あまりにもエスキモーの、アラスカから、あるいはまたアリューシャンで出る、エスキモーの骨と同じだって言うんですね。それでね、「大変だ、日本には昔エスキモーがいたんだ。」そしてオホーツク人というものはエスキモーだと、大々的に宣伝するわけ。で2回目には、2回って僕の行った2回目には、岡正雄っていうね、聞いたことある？最後は明治大学の先生してたけどもね、岡正雄ってドイツに行ってた学者で、民族学者、この人も僕と一緒に行くわけ。

猪熊：岡正雄先生と大学時代の北構先生が発掘してる写真がありますが、あの写真は非常にいい写真ですね。

北構：そう、そう、そう。あの人たちが行って、その中心になった児玉先生は「大変だ」と「大発見だ」と世界的には。今までなかった日本の一部に、エスキモーがいるんだ、ということが、オホーツク文化にまた火をつけるわけよ。

オホーツク文化はですね、ごく、この10年ぐらいに、はっきりしたんですけどもね。オホーツク文化が、日本の古い本の中に、古事記だとか日本書紀ってのが、ありますね。その日本書紀の中にですね、欽明天皇の時代に、佐渡へ^{あしはせ}肅慎というですね、全然見たことも聞いたこともない奴が船でもってやってきた、と。そして帰ることができなくて、そこでしばらくしてるうちに、食べ物だとかなんかに当たるかなんかして、みんな死んじまって、骨がらになった、と。それで「骨がらの崎」という名前を付けた、という記録がね、たった一つだけ、これがオホーツク文化とオホーツク人と関係があるんじゃないか、と言われているものがあるわけです。

というのは658～660年がですね、斉明天皇という女の天皇だけど、素晴らしい英傑の天皇さんはですね、日本の北方討伐に出かけるんですよ。そして蝦夷というのは、今日のアイヌ人の先祖だといわれているんですけども、その蝦夷の他に、違う人間がいたという記録を残している、これが肅慎という名前で、中国から来た名前ですけども、であって、それが佐渡の記録と一致する、というようなことになって、ひょっとするとオホーツク文化の人たちが、ある時代に本州まで来たんじゃないだろうか、というのが憶測として持ってたんです。ところがごく最近に

なってからですね、ごく最近ってまあ、もう20年以上前ですけども、下北半島にオホーツク文化の古い土器が出るようになった。それからもう一つは、あの島は？

猪熊：奥尻島ですか。

北構：奥尻ね。奥尻島にですね、古いオホーツク式土器が出ていて、しかもここではですね、大きな^{ろうかん}琅玕の^{ひすい}翡翠の勾玉が出ているんです。しかも大和朝廷においても、これは珍重するほどの、素晴らしい宝石が、遺跡から出たわけです。で、その記録の中にはですね、肅慎と日本の阿倍比羅夫という征夷大將軍ですね。3回行ってらっしゃるんですね。その中の、名前はちょっと忘れちゃったけど、舟を指揮する偉い人がですね、戦死してるんですよ。こういうような人でなければ、それだけの勾玉を持ってるわけがない、というな、それは憶測ですよ。そういうことを、考古学者は頭に持ってるもんだから、一層その奥尻説が有力になって、オホーツク文化は、単にオホーツク海沿岸だけではなくて、ちょっとすると下北半島、それから奥尻、焼尻島からもポツポツ出てるんですよ。こうやって日本海側を綴ってみれば、肅慎というのも意外にオホーツク文化と関係あるんじゃないだろうかというのが今日の説ですね。

北村：民族の大移動ですか？

北構：オホーツク文化にはですね、自分らの作ったもの、骨だとか石だとかの他に、鉄の道具があるわけですよ。その鉄の道具の中で最も特色のあるのが、奈良の正倉院の御物にもある。そしてそれが大体、正倉院の御物ですから6世紀ぐらいから10世紀平安朝の末あたりまで、本州で使われていた^{わらびてとう}蕨手刀があるんですよ。それが、たくさん出てきた。たくさんというところですけどもね、あちこちから出てくるわけです。これが本州の文化との関係があって、時代からしても、お互いの、戦争するということは敵対するんだけど、戦争するというのが、また文化の接触になるんですね。どこの場合でも、そういうことになっているようですよ。

だから、こういうことが、本州の古代とオホーツク人とが物の交換をやったという、貿易をやった一つの証拠に、今でもされているわけです。けれども交換経済ですから、ただくれるってことはないわけですよ。くれるからには、なにかあげなきゃなんない。ギブアンドテイクですからね。それは何がオホーツク人から本州に渡っていった、これは貴重な皮類だろう、となってるわね。

で、その皮も公家を使う白いオジロワシの尾羽だとか、それから毛皮も安

物でなくて、オットセイの皮とか、最高のものはラッコの皮だろうといわれているわけです。そういうものが入って行って、片っぽから鉄の道具が来る、片っぽから原始的なオホーツク海の生産物が上がっていくということで、これが結論的には正しいことだと思うんですね。

● 戦後の考古学について

猪熊：前は戦前のお話を伺ったのですが、今回は、戦後編ということで、戦後いち早く渡辺仁先生（東京大学名誉教授）らとともに調査を開始されていますが、戦後の考古学調査のお話を伺います。

北構：渡辺仁さんは昭和35年だったかな。僕らは昭和37年から八幡一郎先生（東京教育大学）が来て一緒に発掘するわけです。

猪熊：トーサムポロ沼（根室市豊里）の遺跡などでしたか。

北構：そうですね。戦後いち早く、日本人というのは立派なもので、戦後なにがなんでも考古学を再出発させて、日本の根っこをもう一度確立して、そして衰えている戦後の日本を何とかして力を与えようと、今のオリンピック選手と似たような気持ちで始まったわけです。昭和22年の登呂遺跡（静岡市）

の発掘が行われ、そうしたものを見ていましたが、私は札幌農業会にいたわけですよ。私自身、八幡先生が引き受けてくださり、岡正雄先生とも親しかったわけですが、戦時中、日本の占領地域が広がるにつれ、いろんな人たちが日本の政治との関係ができてくるということで民族研究所というものを文部省に作り、幸い私もその末端に加わったのですよ。

そういう経緯もあり八幡先生とはご縁がありましたが、昭和20年終戦の年に結婚するため、根室に帰ってきた。八幡先生は東京にいらっしゃって、私のところで電話がきまして、民族研究所が彦根の高等商業に移ったので来なさいと電話があった。東京の霊南坂にあったアメリカ大使館に民族研究所があったわけですが、危ないということで彦根に疎開したわけですよ。そのとき民族研究所の所長が早稲田大学の学長だった方だが、満州に行くから民族学研究所に来るよう言ってきた。

ところが、不幸にして依頼が来た頃には、僕は7月15日に根室ですっかり空襲で丸裸になり結婚しにきたんだけど、結婚もようやく18日に両親だけいる中で結婚したばかりで、着るものすらなく満州に行くことになって、さあそれで僕も困ってしまった。長い間待つて待つてそして研究所の一員としてくるようにと言われた。しかし、着るものも何もない。それから

親父と相談したんですよ。「いや、俺はそれでもいきたい」と言ったところ、親父は「それはよくわかる。だけど、今のような物もない時代に、しかも戦争の真っ最中に、これから大陸に行ってもどうなるかわからないじゃないか」ということになって、一応は思いとどまったわけですよ。墮落したんですね、学問の志からするとね。ところが、八幡先生はお察しになって、お弟子をつれていくわけですよ。そして鴨緑江を渡ったところの安東という満州の大きな都市がある。そこで終戦になったわけ。

それから2年間、八幡先生は日本へ帰ってこれなかったわけですよ。それで無事に帰ってこれて、ああ良かったなということで、僕も東京に行き、本当に再会を喜んだんですけど、そんなことではじまって、八幡先生とは東京大学から筑波大学の前の東京教育大学の教授になったわけです。

こうした八幡先生との付き合いの中で、根室半島の遺跡調査が実現したわけです。最初の調査が昭和37年で、東京教育大学の学生を連れてやってくるわけですね。それからずーっと何十年か調査をやってそういう流れができた。当時の学生も卒業してすっかり偉くなり、今でもそうした調査をともにする関係が続いているわけです。

● 幻の筑波大学出張所誘致計画

北構：この調査はオホーツク文化の調査というわけではなくて、オホーツク文化を含め、日本で最東端の遺跡を調査して基本的な考古学の出発点としたということだったんです。これは後から筑波大学ができてからも、この計画というものが北方に対する意欲というかそれがありましてね、そして北方文化研究の拠点をつくることになったわけ。そして、亡くなりましたけど増田精一さんという筑波大学の教授が、実は筑波大学でも予算を取って、東京教育大学時代からやってきた調査を引き継いで、そのほかに医学部、農学部、総合的な筑波大学の出張所というところかしいけども、そういうものを作ろうと思うけれども、根室市は協力してくれるだろうかということになった。

早速、私は市会議員をしていた頃ですから、市長のところに行ってどんなものだろうと話したら「それは大変良いことだから、幸いにして別当賀の川口に小学校が空いているからあそこ使ったらどうだ」というだけなんですよ。それで終わったわけなんですよ。ところがですね、日にちが経つうちに天塩町が、筑波大学の出先機関をつくってもらいたいといって、向こうにも関係者に有力な人がいたものですからね、それでもって根室の方は、我々がぼやぼやしているうちに、筑波大学の研究施設は天塩町にいくことになっ

た。天塩町の古い役場の立派な建物に、出先機関を作ったわけです。根室の方はオシャカになっちゃったわけです。

その頃の根室市は熱心ではないわけです。それがすこしずつ根っこを失っていく原因となってね、今だにこういうような状態になっているというのは、言わせてもらえばその恨みを申しあげてるわけではないけども、事実そういう問題があったわけよ。もう少しテコ入れをしていてくれれば、例えば向こう（筑波大学）から助手とジープを1台用意してということになったら、もう少し中に入っていって何とかしてもひとつ根室へというようなことまではいかなかったんだよ。市長あたりにもずいぶん言ったんですけど。

その頃、筑波大学は医学部を設置しようとしている頃で、当時の市長に「ここ2、3年のことではないけども、将来医者不足というのがあるのだから、（大学との提携も）考えなければいけないではないですか」と言ったところ市長は「そうだな」ということで、賛成はするんだけどそれだけの話なんだよ。それで結局消えてしまったということもあったんですね。

猪熊：先見の明というか、先生は現今の医師不足を見通していたんですね。

● 会社経営の傍ら発掘調査を開始

北構：少しずつ根室の経済も復活を

してくるということで、私も妙なことから新聞社をやろうと思って札幌から根室に帰ってきたのに、新聞までいかに印刷屋を始めました。そんなことでもって順調にいったものですから、多少の経済力ができたものですから、それで八幡先生が昭和35年に知床半島の東京大学の調査に学生を連れていらっしゃるわけですよ。一昨年亡くなった東京大学の藤本強先生も来て、この人は面白い人だったけど、この人たちが最初に来た人たちです。そして、羅臼でオホーツク文化末期の頃の竪穴住居跡を3軒ほど掘ってね、その成果が、トビニタイ文化とよばれている。

そんなことで八幡先生が昭和35年に羅臼にいらっしゃったから、私はジープに乗って、標津経由で羅臼に行きまして、そして「先生、なんとか根室に来てください」ということで無理やりジープに乗せて、あのとき東洋史の先生もいて、怪しい僕のジープの後ろに乗付けて、それで無理やりあちこち回って歩いて、トーサムボロの竪穴群とかチャシ群を見てね、見たことないわけですから、あれだけまとまったものは。八幡先生はそれでエキゾチックな遺跡の状態に心を打たれ、そして八幡先生も教授になられていましたから、なんとか予算を作って、根室半島の調査を始めようじゃないかといって、始まったのが昭和37年なわけですよ。

猪熊：写真でみると当時トーサムポロ沼のあたりは馬車道があるだけで、道路も家屋も無いですね。

北構：そうですね。今のような状態と違って道路も家も無い、全く原始的な風景で、原始の世界に飛び込んだような感じで、ある意味で、その他の先生も来ましたが、風景に感を打たれたというのがありましたね。それから学生を連れてきて我々の方は宿泊などの手配をする、先生は先生の方で予算を取る。私と両方合わせてなんとか昭和35年に調査し、後から国の史跡指定を受ける西月ヶ岡遺跡（根室市西浜町）の調査をやるわけです。国指定になるのも簡単なことではないんですよ。幸いにして、八幡先生のような中央の文化財の委員がいたからなんとかなったんですよ。今の人たちはそれを全然知らないけども、経過からすると八幡先生が根室に来たおかげで西月ヶ岡遺跡は国の指定になったということを言ってもだいたい間違いはないと思います。

3年目はものすごく苦労してトーサムポロの古い竖穴を調査した。この時は増田精一先生のお兄さんが関係の会社に居たものですから、ヘリコプターをもってきて、そして我々も乗って根室半島の調査を、学生の測量だけではなくて、ヘリコプターで上からね、ずーっと飛んでその写真は現在で

も残っていますけど、そのような調査も行ったわけです。そのような感じで毎年、八幡先生も来れない年度もありましたが、あとから国分直一先生もいらっしゃって交代で調査を行って、それが一冊の調査報告書として、第一号は3回分の調査が「北海道根室の先史遺跡」（根室市教育委員会、1966年）に収められ、そのあとの5、6回分の調査は「北海道東部地区の遺跡研究」（筑波大学歴史・人類学系、1980年）に収められ、その間、我々も小さな論文を書いています。

私自身、子供の頃からオホーツク文化に魅せられて、学問の世界に入っていくわけです。私の方はオホーツク文化研究を行うわけですが、筑波大学の方はオホーツク文化だけではなく、1年目はオホーツク文化の弁天島遺跡の調査をやり、2年目は西月ヶ岡遺跡で擦文文化の遺跡を調査し、3年目は、トーサムポロ沼の遺跡で縄文時代前期の押型文土器の遺跡を調査した。ものすごくあの時は苦労して調査をして、宿泊するところもなく、発掘作業員を集めるのも苦労して、八幡先生にはよく協力したと思います。

でも、まあまあそのような感じで調査を続けていったということですね。ぼくは、オホーツク文化の研究をやっていましたので、また学生の皆さんが大学の調査が終わった段階で、また僕のオホーツク文化の調査に入ってくる

わけです。幸いにして岩崎卓也先生（筑波大学）が一生懸命やって下さって、岩崎先生は古墳時代の研究者ですから、時間を割いて根室で調査をして頂き、本当に気の毒したと思うけども、私のためというより、根室のためにね一生懸命やって下さいました。その時の学生だった方が成長して、定年まで来て下さっているのが前田潮君（元筑波大学教授）と山浦清君（立教大学名誉教授）で、二人とも博士になりましたけどもね。根室に来て一緒に最後までやって下さったわけです。最後の調査、私も、もう弁天島に上陸できなくなってしまいました、思い出に残るものでした。

● 外国の研究者との発掘調査

猪熊：根室半島での調査を経て研究者になる人もいて、研究者を養成するフィールドのような役割を果たしていたと思います。一方、日本人だけではなく、旧ソ連の研究者も先生の調査現場にお見えになり、先生も国際的な調査を企画されていましたがそのあたりのお話をお願いします。

北構：ちょっと記憶がはっきりしない部分もありますが、何しろ今ここでとりあげているオホーツク文化というのは、オホーツクというのが18世紀頃にロシアが作った軍港ですから、その名前をとってオホーツク海という名

前ができていますのでからね。オホーツク文化というのはいわゆるオホーツク海周辺に広く分布をしているというふうなことで、それが一番適切な名前であるということで、今までできていますよ。

その一番南の端が日本の北海道で、まとまっては根室で、この頃の研究では、もし阿倍比羅夫が来た時の肅慎がオホーツク人だとすれば、北海道の南部の奥尻島それから下北半島あるいは、ひょっとすると日本書紀に出てくる佐渡へ漂流した肅慎、あれまでがオホーツク人ではないかと考えることができるのではないかと思うのですけどね。そういうような非常に分布の広いもので、佐渡がオホーツク人であるとすれば、日本の内部には入っているけども、それでも日本の文化では一番北の方の地域にですね、しかもポツンポ



1977（昭和52）年
トーサムボロ湖周辺竪穴群日ソ共同調査

ツンと出ている。時々オホーツク文化は流氷に乗ってくるアザラシなどと同じようにね、流氷と非常に縁の深い北の文化だというふうにいわれてきて、現在はそれが実証されつつあるわけですよ。日本の場合は最初、北海道の考古学者がオホーツク文化に興味をもったわけです。北海道大学には文学部が無かったから、研究をしていた人たちはだいたい理学部とか医学部など、文学部ではない人たちが、単にオホーツク文化だけではなく考古学に関心を持ったと。そしてオホーツク文化にも関心を持ち、その代表者が河野広道さんだったわけですよ。で、彼がオホーツク文化と名前をつけたとされている。それがだいたい昭和6年頃です。

ところが、一方では本州の方でも、オホーツク文化というのは非常に興味を持たれて、東北大学の喜田貞吉先生だとか、その助手だった伊東信雄先生などもですね、この調査に乗り出すというわけですね。だけどいずれにしても、その頃の文学部の予算なんてのはね、全く貧弱なものでね。

いらないことを申し上げますが、金田一京助先生という、アイヌ文学で文化勲章を受章した方ですが、それでも先生が裕福になったのは、その後のことではないでしょうか。石川啄木を助けていたりしていますけどね、ご自身が決して裕福な人では無かった。自分の食べる物を割いて啄木を助けるとかね、

あの頃の大学の先生、ことに文学部の人たちは恵まれない環境にあったわけですよ。それでも一生懸命やって下さいましたから。そんなことで、北海道のオホーツク文化研究も段々進んでいって、若い良い学者が次から次へと出てきているわけです。

オホーツク文化の大体の分布の地域というのは、日本はごく一部で、長さからすると、1,200km ぐらいありますかね。北千島から南千島まで、これは全部オホーツク文化が分布してます。けども、それよりももっと奥のカムチャツカ半島の一部、それからオホーツク海の方の、オホーツクからずっと奥の方のマガダンだとかですね、それからいろんな、全部の沿岸にはオホーツク文化、と、この辺のオホーツク文化と全く一致してないかもしれないけれども、いわゆる流氷の上で遊ぶ海獣だとか、それからその海の中に生育する魚を取って、大体同じ種類のような生物を生活の基本にしているというのは同じですから、そのオホーツク文化というものを、今もう一回基本的に調べます。というのは日本でも必要性が説かれていますし、ロシア側もそのことについては関心持っていますね。それから黒竜江というアムール川の周辺にオホーツクを作り上げた人たちがいた可能性がある。ウリチという人たちですけどもね。という可能性があるということもあって、中国も、このオホー

ツク文化には関係があるわけです。このことについては菊池俊彦さん（北海道大学名誉教授）が詳しいわけですけどもね。

そんなことでもって、オホーツク文化というのは、我々は日本人としてやってるけども、日本人だけでなく、ロシアと中国と、それからカムチャツカを経由してアリューシャンの方も関係があるという説が一時、これは北海道大学の児玉作左衛門先生が、主として頑張っておやりになったわけで、そしてアメリカの一部も関係があって、アリューシャンはアメリカですから、国際的な北の文化だということになっていて、多少のモノの考え方に、重い軽いはあっても、今でも相対的なオホーツク文化の本質というものに対する考えは、各国でもってやらなければならないということなんですね。

とにかく各国がオホーツク文化というものについて、協力してやろうじゃないか、という姿勢はあるんだけど、ロシアはロシアでいろいろ忙しいし、ようやくメシ食えるようになった、といいながら、産業の開発だとかで遺跡を壊したりしていることもあるわけです。それでも各国の協力でもって、ロシアは主にサハリン、樺太の大学が一生懸命やってますでしょ。あの中のプロコフイエフ氏（サハリン州立博物館）は、歯舞群島の志発島生まれなんですね。そんな学者が出てきたりし

てね。これから国際的な学問の協力が得られるような状態に、具体的になれば、もっとこの問題というのは進んでいくだろうと思うんですね。われわれがかつてほんとに趣味でもって、あちこち行って掘り出した、ということではなくて、せっかくここまで学問が進んできたんだから、それが今度は具体的な、国際的な研究施設でも持ってやっていかなければならないという時期に入ってきてるんじゃないだろうか。こういう断片的なことをあちこち申し上げますけどもね。そういう感じですね。田舎のことですし、我々も微力ですから、そこまではいかないけれども、できるだけ来ていただいて、遺跡を一緒に掘ったりしてるわけですよ。

猪熊：あの当時、冷戦の時代でしたから、非常に平和的な交流というのが、根室で学問を通して行われてたというのがすごく意義が深い。

北構：そうですね。あっ、それで思い出しましたけどもね。終戦のまだ納沙布に外国人が立ち入りできないという時にね、R. S. ヴァシーリエフスキー氏（ソ連科学アカデミーシベリア支部）を東京大と早稲田大と北海道大の人たちが呼んで、僕があちこちから寄付を集め、1978年に現地調査をトーサムポロ沼の遺跡でやったんですよ。その調査だとかなんかも、今となってみる

と重みがありますけどもね。あれが戦後ロシア人が納沙布岬に入った第1号だったと思います。まだ納沙布岬に外国人は正式に入れない時に「学問だ」ということで、納沙布岬に行ってるね。ちょうど自衛隊の人たちが来ててね、自衛隊とロシア人とが交歓するなんてね、あの頃じゃ珍しいことだったんですよ。その時の通訳は加藤九祚さん（国立民族学博物館名誉教授）が来て、通訳をしてくれました。

● オホーツク人のイメージは？

猪熊：、70年代、80年代とオホーツク文化というのが、随分発掘もされてきて、学問も進んでいきまして、90年代、2000年になっても、ずっと先生、弁天島を中心に調査されておりますが、根室に住んでいたオホーツク人の生活のイメージをお聞かせください。



サハリンの研究者と自宅にて

（2016年10月18日）

左からオリガ・シュービナ氏、前田潮氏、北構保男氏、イーゴリ・サマリン氏

北構：そうですね。具体的にはあまり、理論的にはあれですけどね。私は根室生まれで、93歳になる。その間、東京にいたこともちょっとある、結構長くいましたけども。我が家でもっての食生活とですね、今、93歳になって、最近の子供たち孫たちの食生活、われわれも当然それを供給されるわけですけど、随分違うんですよ。我々の子供の時っていうのは、やっぱり根室はお魚が取れますから、カレイがあがる時はカレイを食べる、時期になるとアキアジを食べて、カニをまた楽しんで食べるとかね。そういうなことですからね、それにアサリだとかホッキだとか、今はみんな剥いたものを食うけども、ホタテから始まってね、そのまま貰ったり買ったりする人が多いわけですよ。そうするとそれを食べると、鍋の中にも貝殻が入ってるし、それを捨てたのは家の外に、最終的にはそれを持っていくにしても、一時はその辺にあって、時々ね、ああ、これは根室というのは、やっぱりね、オホーツク人と同じような生活をしてるんだ、って僕はよく言ったもんですよ。そういう実感があるわけですよ。同じものが貝塚から出るものとね、我が家の作る貝塚とは一致したものが出てくるわけだから。それでカジカの味噌汁だとかね、なんかこの頃、あまりカジカっていうのは手に入らなくなりましたがね。それからニシンだとかなんかでも

いろんなもん出てくる。今はめったに見れないようだけど、それこそツカリが顔を出していたりなんかする。それから、こちらの方の半島行くと、クジラが上がって、というふうな噂があって、マッコウクジラが上がったの、こんな大きな牙の歯があるからっていうんで、僕にくれたりね。それからシカが、我々が根室で生活するようになってから、あまりいなくなったのね。「シカが昔いたんだけど、さっぱりこの頃シカを見る機会がなくなった」と、というような話をトーサムポロの古い人達が言ってたわけよ。さて、それが掘るとね、シカの骨が、わんさと、弁天島から始まってね、極端に言うとう山のように、シカの角も出てくるし、シカの骨も出てくる、それからクジラも出てくる、というようなことだね。ちょうど我々が、シカだとかは、あんまりその頃は、生で食べることはなかっただろうけども、食用に供するものは共通のものが随分あるわけですよ。だから我々も、オホーツク人の片割れ、というふうな感じになるわけだけども。

それで、あちこち飛びますけども、オホーツク人というのはどういう人間なんだろう、ということでもって、未だにアイヌ、古いアイヌ、抽象的ですけども、加藤晋平さん（筑波大学）あたりは、古い型のアイヌ人と関係あるんじゃないか、ということを書いてい

ますね。それからさっきお話ししたような北大の児玉作左衛門さんは、オホーツク人というのは全く、アリュシャン、エスキモーは同じ系統のアリュート型というわけですから、そのアリュートと全くよく似ている、と。ということで一時、オホーツク人というのはアリュシャンから、こちらの方に渡ってきたんじゃないだろうか、というようなことなんだけど、この頃の結論は、琉球大学にいる石田肇さん、この方、一生懸命やった方ですから、自分としては、残念ながらデータを取れないから、結論的に言うことはできないけど、自分は、オホーツク海の中でも、黒竜江（アムール川）の下流域にいるウリチという人間に一番似ている、と。これは間違いなくオホーツク人というのはウリチではないだろうか、ということなんですよ。だけど、そのデータの完全なものをね、たくさんの方の標本でもって、結論づけるわけにいかない、というのが現状だ、というのを何年か前に、そうおっしゃってましたね。今でも変わらないんじゃないだろうか？

北村：穀物は食べてないの？穀物？

北村：あっ、オホーツク人はですね、一番寒いところに分布していますから、自分で作るということはなかったようですね。ですけれどもオホーツク

人の竪穴、住んだところからは、たまに穀類が出てくるんですよ。網走のニツ岩の遺跡だとかなんかですよ、これは麦の一種がカーボン化したものが出てきますね。そういうことで自分は作らないけれども、交易をして、やっぱり穀類というものは主要な食べ物になってる、というようなことになってるようですね。人間というのは、戦争やって、殺したり殺されたりしても、ちょっとすると女性と男性とはくっつくし、それからそこにあるものは持っていくものもあるし、持ってくるものもあるし、そのようなことで、文化の交流というものは意外に激しいものだろう、と。われわれはそう思ってるわけです。私が言うだけでなく、みなさんそういう説なものですから、そういうものでもって、交流が意外に行われていたんじゃないだろうか。

北村：言葉、文字の文化はあったんですか？

北構：文字はやっぱり、アイヌ人でも文字持ってませんからね。ですからアイヌ人と、日本の古代のエミシといわれてる東北地方の住民とが、直接、アイヌ人がエミシである、とは言われなにしても、文字はやっぱり、エミシも持ってないわけですよ。エミシのこと書いてるのは、みんな日本側の記録

だけであって、エミシ側の記録というのはないですから、だから残念ながら、そういうものの記録、記号はあるけれども、それを思想的に綴っていくという文字は、どうも今のところない、ね。アイヌ人なんて、いくらか文字は入ってもいいはずなんですけど、入ってないもんね。

猪熊：無文字時代のコミュニケーションの仕方っていうのは、非常に気になっていて、例えば、この辺りの道東アイヌっていうのは、ロシア人と毛皮のやり取りをやってますけども、どうやって言語を超えて、商取引をやったのかなっていう…。

北構：結構あれなんじゃないかな、日本人、われわれなんてのは外国語ってのは全く慣れないけどもね、なかなか馴染まないけども、原始人は意外に、原始人だけでなく、必要に応じてね、アイヌ人でもロシア人と会話する人がいましたしね、で日本人が行くと、日本人とロシア人の間を慣れたアイヌ人の通訳がやったりね。

ほんとに困ったり、なんかしなければならぬ時になってくると、身振り、手振り、というものがね、案外、通じるんでないだろうか。そうでないや、先史時代の交流ってのは、ないはずなんだけどね、意外にあるわけでしょう。

北村：モンゴルの方にある遊牧民、遊牧、ゲルを使ってね、そういう生活ではないんですかね？

北構：オホーツク人は動物を飼うということがあったとすれば、イヌを飼っていました。

北村：イヌを？

北構：ですから弁天島からも、イヌはたくさん出ます。それからもう一つは、オホーツク人というのは、主要な生活形態というのは、大陸にあって、それがこちらの方まで、進出してきた。ということからすれば、一番この辺から見て北の方、例えば稚内だとか利尻、礼文だとか、樺太の一部だとかにはですね、動物、カラフトブタ。ブタを飼っていた。けどもだんだん道東に来るにしたがって、ブタのエサがなくなるといようなことで、ブタはやめて、そしてイヌだけにしたとか、そういうことが言われてるわけです。

川崎：ニワトリはどうですか？

北構：ニワトリは、ないようですね、今のところね。イヌはたくさんありますけどもね、僕は遺跡からネコの骨を稚内で発掘したことある、これは後から入ったもので、直良信夫先生っていう早稲田の人が見てくれて、ネコはど

うもないようですね。イヌはもう食べてましたから。だから北方民族っていうのは今でもその名残りでしょうけども、犬橇を引っ張って、カムチャツカ辺りで、そして困ればそれを食って、やってるわけですよ。それと同じような生活形態、オホーツク人の場合は、魚が主体ですけども、必要に応じてイヌも食べてたということがこの頃はつきりしてるんですね。

川崎：太平洋は3,500年前にアジアから人が動いてんです。でやはりブタとイヌとニワトリ、連れてってます。

北構：あっ、ニワトリもですか。ああ、そうですか。

川崎：3つ、でも島によっては2つし



カラフトブタ下顎（弁天島貝塚竪穴群出土）

かないところもあるんですけどね。3つ揃ってるところもあるんですけども、そのうちの3つの中の2つをバリエーションで、連れて行ってるんですね。彼らもやっぱり魚食います。その辺、南と北に人類移動っていうのがあった可能性がありますね。

北構：そうですね。

猪熊：弁天島の発掘だとトリというと、アホウドリの問題というか…

北構：ええ、アホウドリの、今ではこっちの方で見られるかどうか知らないけど、アホウドリの骨がいくら出るんですね。大型の鳥ですから、一匹取れば、ずいぶん食べがいがあったんじゃないかな。

猪熊：肉も毛皮も骨も使えるということで、アホウドリは非常に大量に出て。だから今、近寄らない鳥も、当時は近寄ってたっていうのがわかりますし。

北村：気象条件？

猪熊：そうですね。環境が、ちょっと暖かったんでしょうかね。

北構：オホーツク文化というのは、大体数百年続いたっていうんですけど

も、右代啓視君（北海道博物館）あたりの説によると、暖かい時期があったんですね。何回かあって、その中の一回目は、あれ何だったろう、ハماغリってね、多来加の遺跡から出てるというようなことね。あれはもう暖流帯でなきゃないもんですからね。

北村：交流する上で移動は舟だったのか。例えば冬であればね、流氷が、相当厚めの流氷がたくさんあって、しかも長い期間がね、そうすると流氷から渡って交流したとかね、ありますよね。

北構：そうですね。今たまたま交通のお話がありましたけどもね。例えばオホーツク人というのは、とにかく海をまたいでカムチャツカへ行く、もちろん千島列島を一つ一つ、丹念に伝わってくるんでしょうからね、そんな大洋を航海するっていうことでないにしても、長距離の航海やるわけですよ。それじゃ、どんな船に乗ったか、っていう問題があるわけですね。これがまたわからないんですよ。私たちはアイヌ人と同じような簡単な船で、丸木舟を。

川崎：刳舟ですね。

北構：一つの大木を3分の1ぐらい上を剥いで、それを筒のようにずっとして、そしてその両側に舷側をつけるわけですよ、丸木舟のね。そうしたら簡

単な構造船を作ってやったんだろうというんですけど。未だに、もうすでに亡くなってるけど、川舟でないだろうか、ということを考えてらっしゃる方もあったんですね。直良先生など川舟説だったからね。

舟の格好したものは、関連して申し上げると、土で作った、カップくらいの舟形の土製品は10個以上出てるんですよ。根室の弁天島でも壊れてますけどもね、出てるんですよ。だけでもその他にですね、いろんな木の、燃え残りのもので舟のような恰好をして出てるものがあったも、舟ということよりも食器、と考えた方が妥当だということになってね。その小さいものは、舟の格好はしてるけども、果たしてこういうものを作ったかどうかということについては、まだ決定的な学会の承認を得てない、というなものもあるんです。オホーツク人ですから舟が大事な問題ですけども、そういうことはまだわかってないというね、意外なところに、残り物があるんだなあ。

猪熊：水産都市の根室の基層文化とまではいかないですけども、オホーツク文化はある程度、今の産業構造と似てる部分があります。

北構：食物ということからすればね、さっきお話ししたように、我々の子供の時なんてのは、今と食生活が違うか

ら、あの頃の生活というのは、ここから取れたものを、漁師が持ってきて、魚屋が売って、買ってすぐおつゆにしたり焼いたりして食べますから、全く似てるんだよ。

猪熊：同じですね。そういう意味では、郷土史の一番根っこの部分、産業構造の一番根っこの部分を調査されて何十年というような感じで、かなりたくさん成果を出されている、ということになりますね。

北構：いやしかし、なかなかわかんないもんですね。学問というのはね。結論をつける、ということは最も躊躇される、未だに邪馬台国がね、今でもこの頃載ってるでしょ、いろんな本出してね、邪馬台国についての疑問だとか。

川崎：国なき時代の古代人の方が、今でいう国境を越えて、遥かに移動もし、人と人と結びついている。

北構：そうですね。国境のない時代ですからね。国境のないというのは、全くいろんな民族同士の争いとか、いろんなことあったらうけど、国境がないという世界というものは、我々ちょっとわかんないわけですよ。だから平和でよかったのか、我々は文明を何しながら、拘束されてね、妙な生活してるのか、そういうこと考えられます。

北村：いわゆる集落だけで、政治みたいな、地域を統制するような、そういう民族ではないのね。

北構：そうですね。オホーツク人自身は、一つの集落を作っていて、弁天島であれば、一つの時代には、おそらく二つか三つの竪穴を掘って、そこにですね、意外にたくさんの40坪もあるような建物あるわけですから。40坪。

川崎：大きいですねえ。

北構：40坪っていったら、今でも大変な大きなもんですよ。だけど倉庫も



捕鯨彫刻図針入

北構氏が13歳の頃発掘した、舟と捕鯨シーンが線刻された針入（長さ7.8cm）



弁天島貝塚竪穴群のオホーツク文化竪穴住居跡

いろんなものあって、大きな炉もある。けども20人や25人はですね、生活できたらう、と。その竪穴が二つあれば、ある一つの時代、40～50人の人たちがいた、と。オホーツク人の場合は船持ってますから、その船がどういう船かは別にしまして、弁天島のようなところでは水も満足にないわけですよ。真水もないとこなんですよ。

だからそういう生活の中でね、やはり陸地と離れたところに生活するというのは、それは政治的な何かがあったから、自分たちは向こう（弁天島）へ行ったんで、他の人たちとこちらの方の擦文人と一緒にってないわけだから、擦文人は擦文人で、別な竪穴の格好でね、別な住居に住んでる。向こうは向こうでもって1所帯、2所帯集まってね。それはもう、オホーツク人の場合は船を持っていて、あの辺に船を上げていて、危ないとなったら、犬から何から、後から来た千島アイヌのようにね、全部乗っけて、ざあつ、とこう出て行ったと思うんですよ。そういうこともあったと思うんですね。

だけど、そんな不安定な生活だけだったら、人間は生きていられないからね。やっぱり安定した時代というものもあって、それからまた騒がしい民族同士の争いだとかがあって、それにはそれを克服するような対応の仕方をしたんでないのかな。

北村：平均寿命はわかるんですか？平均寿命、年齢？

北構：年齢はわかりませんね。だけど、だんだんわかってくるんでないでしょうか。というのはですね、日本の石器時代人というのは、もうだいぶ前の話ですけど、40（歳）まで生きるっていう人は少ないんですよ。病人が、カリエスになったりなんかして、湿気が多い竪穴の中に住んでたから、カリエスになったりなんかする、と。言っても、とにかく40までなんてこと考えられないわけですから、みんな若くて25、26かそのぐらいでもって、働いて、事故にもあうだろうし、そして食糧難にもあうだろうし、そうするとやっぱり長生きしないでいくんでないですか。我々の祖先、みんなそういうようでしたからね。だから今の時代、そういう点からすると、全く幸せな時代になってきているんだけど、爆弾落とされて、いっぺんに10何万人も死ななきゃなんない、ていうこともあるし、何がどうなんですかね。

北村：やっぱり男社会だったんでしょ
うね？女社会？

北構：男ですか？意外に女の出番が多
かったんでないですか。というのは男
だけでは、人間の生活ってのは暮らし
ていけなかったんでないでしょうか

ね。やっぱり何としても夫婦一族協力
して、子供だって立ち上がると同時に
食べ物その辺から探してね、海岸行っ
て何か取ってくるとか、そういうよう
なことだったと思いますね。だから意
外に女性というのは、力があつたんで
ないだろうかな。それがかえって、封
建時代になってから、女性が弱くなっ
ていくということがあつたんじゃない
でしょうかね。

北村：本当に、2回にわたりまして、
ありがとうございました。

北構：どうも、大変散漫なことを申し
上げました。

北村：いいえ、本当にご高齢といえ
すね、若々しくて、特にお話し内容は
もっと若くてですね、はっきりおっ
しゃっていただいて、記録に残るな、
と思いました。本当に有り難く、お礼
を申し上げたいと思います。

北村・川崎・猪熊：ありがとうございました。

北構：どうもかえって、失礼いたしま
した。ありがとうございました。

根室市指定天然記念物「歯舞湿原」の紹介

外山 雅大

(根室市歴史と自然の資料館)

はじめに

歯舞湿原は、環境省が選定する『生物多様性保全の観点から重要な湿地』に選ばれている根室半島湿原群の一つで、高層湿原を中心とした市街地以東の根室半島では最大の湿原です。これまでの研究で地史、生物地理学、生物多様性保全上重要な場所であることなどが明らかになっています。

しかし、近年、周辺の開発等が進み、調査研究を進めている研究者、自然を愛好する市民などから、学術的に重要かつ根室市独特の自然景観であり、多くの希少生物が息息する歯舞湿原をなんとか未来へ残していけないだろうかという声があがりました。

そこで、根室市教育委員会では令和5年2月に歯舞地区にある263.1haを根室市指定天然記念物に指定し、保全を図っていくこととなりました(図1, 写真1)。ここでは歯舞湿原の持つ学術的価値や私たちの暮らしとの関わりについて紹介していきます。

1 万年以上独特な気候で維持

釧路湿原をはじめとした根釧地域の



図1 歯舞湿原の位置



写真1 歯舞湿原遠景

低地湿原は、地球が温暖で海水面が上昇していた縄文海進(7,000～5,000年前)以後、再び海水面が低くなった、海退の時期より形成が開始されたことがわかっています。

一方、根室半島の台地上にある湿原は海水面の上昇・下降の影響を受けず、

完新世前後（1 万年以上前）の暖流の北上に伴って発生した夏季の霧とそれが引き起こした低温などの特殊条件の影響を受け形成が開始されました。歯舞湿原は約 1 万 2 千年前に形成が開始されており、落石岬、ユルリ島の湿原とともに北海道内で最も古い歴史を持つ湿原の一つなのです（表 1 参照）。

国内唯一のブランケット型泥炭地

大半の湿原が水のたまりやすい平坦な土地にできるのに対して、歯舞湿原は台地上の緩やかな傾斜の上を泥炭が覆い形成されています。基盤地形の起伏を泥炭がブランケット（毛布）をかけたように覆う、歯舞湿原のような場所はブランケット型泥炭地と呼ばれています（図 2）。スコットランド・ノ

ルウェーなど低温で降雨量の多い地域でみられ、現在、国内の低地でブランケット型泥炭地が確認されているのは歯舞地区の湿原のみとなっています（近藤他 2020）。これも霧が多く、水分が供給され、ミズゴケが繁茂する根室独特の気候が作り上げたものと言えます。

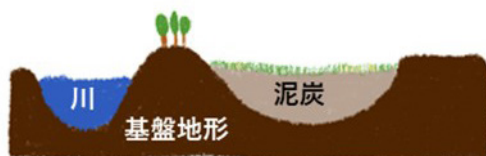
生物地理学、生物多様性保全上の価値

歯舞湿原は低地にありながらクロマメノキ、タカネナナカマドなど、本州や北海道の他地域では高い山に生育する植物が多くみられます。また、国内では大雪山高根ヶ原、猿払川湿原、知床羅臼湖など非常に限られた地域にのみ隔離分布するムセンズゲや、大雪山、日高山脈、西別岳など高い山にしか

表 1 根釧地域の湿原の形成開始年代

湿原名	標高	形成開始年代	立 地
歯舞湿原	約 33m	約 12,000 年前	中期更新世の海岸段丘
落石岬湿原	約 49m	約 14,000 年前	中期更新世の海岸段丘
ユルリ島湿原	約 40m	約 13,500 年前	中期更新世の海岸段丘
風蓮川湿原（支流）	約 7m	約 5,000 年前	沖積平野
釧路湿原	約 8.5m	約 5,000 年前	沖積平野

一般的な低地湿原



ブランケット型泥炭地

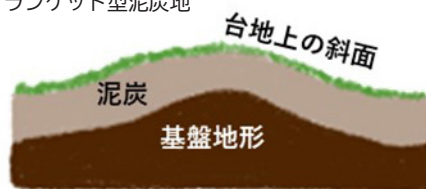


図 2. 一般的な低地湿原とブランケット型泥炭地の比較

（北海道大学富士田教授研究チーム作成図をもとに改変し作成）

生息しない高山蝶、カラフトトリシジミなど、氷河期の遺存種[※]の生息が確認されており生物地理学的にも重要な場所となっています（写真2）。

北海道大学等の研究チームが行った調査によると、歯舞湿原では維管束植物 48 科 163 種が記録され、環境省レッドリストに記載される種が 20 種、その内、湿原性の絶滅危惧種は 16 種でラムサール条約湿地に匹敵します（北海道大学・富士田、井上教授提供資料より）。歯舞湿原は面積も大きく、多様な湿原環境が発達、かつ良好な状態で保存されています。

※
寒冷な氷河期には広い地域に分布していたが、気候が暖かくなった現在は生息環境が高山などに限られ、取り残されたように分布・生息する種を『氷河期の遺存種』といいます。

歯舞湿原の持つ生態系サービス

私たちの暮らしは食料や水の供給、気候の安定など、生物多様性を基盤とする生態系から得られる恵みによって支えられており、これらの恵みを「生態系サービス」といいます。

湿原は CO₂ の吸収、水量の調整、水質の浄化、観光資源としてなど、私たちにとって有用な多くの役割を果たしており、中でも際立つのは炭素の蓄積



カラフトトリシジミ (NT)



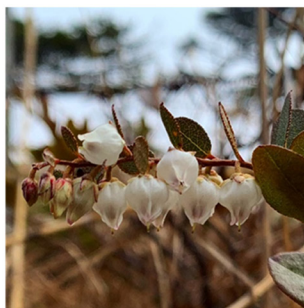
ヒメシャクナゲ



エゾゴゼンタチバナ (NT)



トキソウ (NT)



ヤチツツジ (EN)



ムセンズグ (VU)

環境省レッドリストにおいて NT は準絶滅危惧種、VU は絶滅危惧Ⅱ類、EN は絶滅危惧ⅠB 類

写真2 歯舞湿原でみられる生物

です。森林などではCO₂を吸収しますが、植物が枯死すると分解される際に炭素となり、それがCO₂となって大気中に放出されます。しかし、湿原、特に高層湿原は植物遺体が分解されず、泥炭として炭素が蓄積されます。歯舞湿原をはじめとした、根室半島の台地上にある高層湿原は形成が開始されてから1万年以上も炭素を固定、蓄積し、大気中へのCO₂の排出を抑制する役割を果たし続けています。このような、気候変動を抑制するような生態系サービスは“気候調整サービス”と呼ばれます。

一方、湿原が開発されると、蓄積された炭素が大気中に放出されてしまい、仮に北半球にある高層湿原に蓄積されたCO₂が大気中に放出された場合、温室効果ガスの量が現在の2倍になるという試算もあります。歯舞湿原をはじめとした湿原を保全することは温室効果ガスの抑制、地球温暖化対策としても大きな役割を果たします。

まとめ

根室では身近な存在である湿原。見た目はただの原っぱかもしれませんが、根室独特な気候に育まれ、氷河期の遺存種をはじめ、多くの生物が暮らす場所であり、地球温暖化対策にも一役買ってくれています。歯舞湿原は根室市指定天然記念物に指定され、今年6月には歯舞学園の6年生と一緒に、

湿原の植物を観察し、その成り立ちを学ぶ出前授業を実施しました。

2030年には野付風蓮道立自然公園を拡張し、国定公園にする計画が進んでいます。湿原をフィールドに学習することを通して地域の子供たちに根室の自然環境とそこに暮らす生物の面白さ、素晴らしさを伝えていければと考えています。

謝 辞

北海道大学大学院農学研究院の富士田裕子先生、井上京先生におかれましては湿原の保存についてご指導賜りました。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 五十嵐八枝子ほか(2001). 北海道東部根室半島・歯舞湿原と落石岬湿原における晩氷期以降の植生変遷史. 植生史研究, 10(2), 67-79.
- 近藤玲介ほか(2020). 北海道東部, 根釧台地における海成段丘上の湿原の形成年代. In 日本地理学会発表要旨集 2020 年度日本地理学会春季学術大会 (p. 359). 公益社団法人 日本地理学会.
- 釧路昆虫同好会 根室半島の昆虫 根室半島昆虫類調査報告書 1999.
- 中谷正彦.(2007). 歯舞湿原のカラフトルリシジミ. 根室市歴史と自然の資料館紀要第21号. 65-67.
- 富士田裕子.(2017). 湿原の植物誌: 北海道のフィールドから. 東京大学出版会.
- 富士田裕子ほか(2020) 北海道東部根釧台地の最終氷期以降の湿原形成と植生変遷. 科学研究費助成事業 研究成果報告書.
- 矢部和夫ほか(2017). 湿地の科学と暮らしー北のウェットランド大全. 北海道大学出版会.

令和4年度の埋蔵文化財調査

工事立会

調査日	包蔵地番号・名	協議地地番	面積 (㎡)	協議者	工事概要	結果
令和4年 5月17～18日	N-01-43別当賀川 口1竪穴群	川口1-1地先、2-2地先、2-3地先、91-1地先、91-2地先	1,165.4	釧路開発建設部	道路工事	土器片4点（縄文後）、黒曜石フレイク1点、叩き石1点、礫4点
5月31日	N-01-291駒場町遺跡隣接地	牧の内147-1	214,500	(公財)北海道農業公社	草地改良	遺構・遺物なし
6月7日、 8月31日	N-01-1トーサムボ 口湖周辺竪穴群	豊里124-13 ～145-2	16	東日本電信電話(株)	電柱建替	遺構・遺物なし
8月 5日	N-01-88カイカラ コタン1竪穴群	初田牛 368-1	20,059	北海道根室振興局長	草地改良	遺構・遺物なし
8月 5日	N-01-89カイカラ コタン2竪穴群	初田牛 368-1	30,270	北海道根室振興局長	草地改良	遺構・遺物なし
8月 5日	N-01-137カイカラ コタン12竪穴群	川口79-2	27,921	北海道根室振興局長	草地改良	土器片1点
8月 5日	N-01-138カイカラ コタン13竪穴群	川口79-2	11,025	北海道根室振興局長	草地改良	遺構・遺物なし
8月 5日	N-01-139カイカラ コタン14竪穴群	川口79-2	27,510	北海道根室振興局長	草地改良	遺構・遺物なし
8月 5日	N-01-141カイカラ コタン16竪穴群	川口79-2	11,815	北海道根室振興局長	草地改良	遺構・遺物なし
8月15～18 日、 11月1日	N-01-1トーサムボ 口湖周辺竪穴群	豊里41、81-1、 82-1温根元	18	北海道電力 ネットワーク(株)	電柱建替	土器片106点（縄文早） 叩き石1点、礫17点、 砥石1点、石皿1点 黒曜石チップ1点、 貝、魚骨等273点
10月18～19日	N-01-305 厚床1竪穴群	根室市厚床1丁目	784.2	釧路開発建設部	農業用水工事	遺構・遺物なし

令和４年度の受入資料

昨年度も貴重な資料を多数お寄せ頂きました。記してお礼申し上げます。

受入番号	寄贈者	資料名	点数
1328	中沢 愛樹	中沢茂関係資料	3,594
1329	油谷 昭雄	油谷家具店の資料	47
1330	根室市役所会計課	小切手・手形用タイプライター	1
1331	田村 孟	花咲小学校創立 90 周年記念誌、私家版「石は」 (岡田太次郎、岡田ヨイの思い出)	2
1334	橋本 健	根室支庁管内図、根室市市街図	2
1335	渡辺 和典	古写真	20
1339	小谷 裕介	エトピリカ	1
1340	根室市図書館	旧市史編纂室資料、花咲小学校開校 110 周年記念 しおり、下敷き、校章メダル、高碇達之助顕彰碑 落成式写真帳	200
1341	市川 晃	三国通覧図説序（写本）、アイヌ英和辞典及アイヌ 語文典（J. バチェラー 1905）、カメラ（アメリカ 製 KODAK 社）	3

合計 3,870 点

令和4年度のおもな普及事業

★ 展示事業 ★

歴史と自然の資料館常設展示整備
アイヌ文化資料展示造作整備
アイヌ家屋復元模型製作
オホーツク文化資料複製品製作

★ 観察会・見学会等 ★

「春の春国岱でビーチコーミング
干潟の生物を探してみよう」
開催日 2022/5/3
開催場所 春国岱海岸
「虫眼鏡散歩 小さな春を探そう！」
開催日 2022/5/7
開催場所 東梅自然学習林
「日本で落石岬だけに咲くサカイツツジ
を見に行こう」
開催日 2023/5/21
開催場所 落石岬
「バスツアー 根室半島湿原巡り」
開催日 2022/7/10
開催場所 市内
市民講演会
「根釧地域の湿原と歯舞湿原の価値」
開催日 2022/8/9
講師 北海道大学教授
富士田裕子 氏

★ 調査・研究等 ★

根室市内チャシ跡現況測量調査
アイヌ文化資料保存処理
環境モニタリング調査（カラフトルリシ
ジミ生息地・市内高層湿原）

★ 文化財普及 ★

日本遺産構成文化財サイン整備
ヲンネモトチャシ跡、ノツカマフ1・2
号チャシ跡、金刀比羅神社展望台、
明治公園、厚床フットパス入口、
JR 厚床駅前

日本遺産普及事業（協議会事業）
北海道根室まるごとフェア 2023 ブース
出店 2023/2/19-20 新宿西口広場
日本遺産の日 in Japan 出店
2023/2/11-13 有楽町駅前広場



根室まるごとフェア 2023 日本遺産ブース

2023年 9月 印刷・発行

編集 猪熊 樹人

発行 根室市歴史と自然の資料館
〒087-0032

北海道 根室市 花咲港 209

tel/fax : 0153-25-3661